

I 2020年度の東洋文庫

2020年度において東洋文庫が実施した諸事業の経過を説明する前に、まずいくつかの訃報に触れなければならない。

2007年より13年にわたり、東洋文庫の第12代理事長を務められた榎原稔氏が、2020年12月13日に心不全のため90歳で逝去された。榎原氏は1956年3月に三菱商事株式会社に入社した後、1992年に社長、1998年より会長を歴任した。その後、2001年6月から東洋文庫の評議員に就任、2005年6月に理事に就任、2007年6月には理事長に就任された。およそ35年間を英米両国で過ごし、わが国の財界を代表する「国際派」として知られる同氏は、日本人が自国やアジアの文化に根差したルーツを理解し大切にすることが、グローバル化の礎であるとの考えを抱いておられた。それゆえに、アジアの歴史と文化の専門図書館・研究機関である東洋文庫が社会において果たす役割の重要性を深く理解し、国内外の学術機関との連携や、幅広い普及活動と情報発信の実現に向けて尽力してこられた。

国際的な連携としては、ハーバード・エンチン研究所及び同図書館、そして台湾中央研究院歴史語言研究所との協力協定を実現するなど、世界有数のアジア研究機関との交流、協力体制を強化した点が特筆される。また、上皇・上皇后両陛下（ご来庫当時は天皇・皇后両陛下）をはじめ、国内外の要人に東洋文庫を紹介し、ご来庫の栄を賜った。2010年落成の新北館とミュージアムの開設にも計画段階から取り組まれ、実現に大きく貢献された。ミュージアムの開設により、東洋文庫は従来の図書館・研究機関としての活動に加え、一般の方々に蔵書や所蔵品を公開・普及するための活動が始まり、現在に至る。

同氏のご尽力に深く謝するとともに、衷心よりご冥福をお祈りする次第である。なお、同氏の逝去に伴い、次期理事長の決定まで、杉浦康之専務理事が東洋文庫代表理事としてその任に当たった。

また、12月6日には有馬朗人評議員が90歳で逝去された。有馬氏は、原子核物理学者で、東京大学総長や文部大臣・科学技術庁長官等を務められ、1989年4月から1993年4月までの4年間、および2007年6月以降の13年間、計17年にわたり、東洋文庫の評議員として数々のご提言等をいただいた。謹んで

ご冥福をお祈りする。

遡って7月21日には、ミュージアム諮問委員の山本寛斎氏が76歳で逝去された。同氏には2016年のミュージアム諮問委員会設立時から参画いただいております。ご専門のファッションデザイナーとしての観点のみならず、大所高所より貴重なご意見を賜った。心からご冥福をお祈りする。

次に、東洋文庫での新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策について述べる。2020年2月末には感染拡大が大きな社会的リスクとなったため、東洋文庫でも3月3日より全館を臨時休館とした。その後、4月7日に日本政府による緊急事態宣言が東京都に発出されたことを受け、職員の時差出勤及びテレワークを推奨し、出勤時には検温を行う等の感染防止対策を講じた。

なお、5月25日の緊急事態宣言解除に伴い、職員は段階的に通常勤務へと復帰し、6月24日よりミュージアムを、7月29日より閲覧室を再開した。7階研究室・2階講演室等の施設利用については、ガイドラインを作成し、感染状況を見ながら随時改定しつつ、管理運営を行った。

本年度内に生じた役員・職員の異動については次のとおりである。6月の評議員会では、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、書面での決議を以て任期満了となった理事4名の改選が行われた。結果として杉浦康之、斯波義信、中根千枝、畔柳信雄の各氏が再任された。新たに高田時雄氏が理事に選任された。

任期満了によって退任した評議員はいなかったが、羽入佐和子評議員が国立国会図書館長退職に伴い評議員も退任され、新たに同館長に就任された吉永元信氏が評議員に選任された。

その後、評議員会と同様に書面での開催となった臨時理事会において、杉浦康之理事が前年度に引き続き専務理事に選出された。また、業務執行理事（常務理事）に、斯波義信理事、高田時雄理事が選出された。

12月に榎原氏と有馬氏が逝去されたことにより、評議員11名、理事8名、監事2名の体制となった。

資金運用では、2020年度中に満期となった大阪府公債公債4千万円を相模原市公債公債に買い替えた。債券（約24億1千万円運用）の平均利回りは前年度に引き続き0.76%であった。株式（約4億3千万円運用）の平均利回り

は3.65%（前年度比0.32%減）となった。総合的な結果として、2020年度の全体利回りは1.20%（前年度比0.05%減）となった。

経費削減には引き続き努力しており、節電を実施している。新電力の市場規模拡大により、前年度は川重商事株式会社から株式会社エナリスへ、また更に、本年度はシナネン株式会社へと変更を行い、経費削減への努力を行っている。東京電力の場合と比較すると年間約400万円の削減となる。また、本年度は名誉文庫員2名より計40万円、斯波義信文庫長より500万円のご寄付をいただいた。

設備関連では、1階の紙質調査室を7階の共同研究室へ移設する工事を行った。また、空調等の故障した設備についても修繕を行った。

当文庫のデータベースのアクセス数（訪問数）は、月間約86万件となっている。本年度の当文庫の図書の増加は、購入1,915冊、受贈1,295冊、合計3,210冊であった。

東洋学講座は、前期に東南アジア研究班、後期に日本研究班が担当する予定であったが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、次年度に延期とした。同様に、東洋文庫アカデミア・公開講座・公開研究会・シンポジウム等も延期または中止とした。

研究資料の出版では、本年度は定期出版物8冊に加え、オンラインジャーナル1件、論叢類3冊を刊行・公開した。

ミュージアムでは、感染防止対策を行ったうえで、6月より展示を再開した。再開後も開館時間を短縮する対応を続けている。

- (1) 「大宇宙展一星と人の歴史」2020年6月24日～9月22日
（緊急事態宣言を受け、当初の5月27日～9月22日の日程から変更）
- (2) 「三菱創業一五〇周年記念 岩崎文庫の名品—東洋の叡智と美—」
2020年10月7日～2021年1月17日
- (3) 「大清帝国展 完全版」2021年1月27日～4月25日
（緊急事態宣言を受け、当初の1月27日～5月16日の日程から変更）
を開催し、年間計19,789名にご来場いただいた。それぞれの図録を「時空を

こえる本の旅」シリーズとして刊行した。

六義園の臨時休園に伴い、例年行っていた「六義園をめぐる歴史」の展示は中止とした。シーボルト・ガルテンの新たな造形展示物（本年度の東洋文庫賞）は、東京藝術大学大学院、永井遼太郎氏の卒業作品「具現」であった。また、成蹊大学図書館への出張展示は本年度も継続して行った。

株主優待（東洋文庫ミュージアム無料招待券）の利用状況については、三菱重工業、三菱商事、三菱総合研究所から合わせて5,233名にご来場いただいた。

前年度に引き続き本年度も、月刊のメールニュースの発行、機関誌である『東洋見聞録』の刊行を行ったほか、校外学習・博物館実習の生徒・学生を受け入れた。また、三菱創業150周年記念事業の一環として、『岩崎文庫の名品：叡智と美の輝き』（山川出版社、2021年2月）を出版した。